

各委員提出資料

目 次

秋田委員提出資料	．．．．．P．1
大場委員提出資料	．．．．．P．3
島田委員提出資料	．．．．．P．5
松田委員提出資料	．．．．．P．7
御園委員提出資料	．．．．．P．9

1 保育・教育の定義に関して：用語「保育」と「養護・教育」の使用区別

3 - 5歳のすべての子どもに等しく、ユニバーサルな教育を保障すべきと考え、法制上は学校教育法で規程される部分と児童福祉法で規程される部分を分けて取り扱うのが妥当である。ただし、こども指針の語の定義としては、0 - 6歳までを一貫して一つの語で扱う、「養護および教育」という目的を切り分けずに使用する語として保育を使用することを原則とし、こども指針では養護と教育を一体的に専門家が展開する営みを、「いわゆる「保育」」という記述ではなく、「保育」（保育所保育指針ならびに学校教育法22条において使用される意味での「保育」）という語で説明記述することが、日本の保育の歴史的背景からも、現在の国際的動向からみても強く望まれる。

「養護」と「教育」は機能、目的概念であり、「保育」は専門家が具体的に園生活において行う営み、行為を示す概念として定義されるべきである。こども指針が保育者ならびに保護者に利用されるものとして作成されるためには、保育という語を、社会文化的歴史的慣習を踏まえ使用すべきである。

2 こども指針の構成等に関して

A ワーキングチームでの議論に含まれるべき事項

こども指針の構成や内容だけではなく、今後こども指針実施普及啓発のあり方（解説書等）、指針の実現状況の評価を含むこども園での質評価のあり方と関連づけて、ワーキングチームでは系統的な議論がなされるべきである。

B こども指針に盛り込むべき内容

1) 対象範囲に関して

基準性の保障：質の保障の観点から、施設における保育・教育の基準（ナショナルスタンダード）として位置づけられるべきである。したがって、基本的に保育を行う園・保育者を一義的な対象とすべきである。ただし理念は重要であるので、2部構成で1部は法的拘束性をもたせず、2部は法的拘束性をもつものとして作成することに賛同する。解説書において、保護者や社会一般の人に具体的によくわかる指針解説書を作成することとすべきである。

基準の記述法：スタンダードにおいては、これまでの幼稚園教育要領・保育所保育指針が行ってきた、子どもの保障されるべき経験と修了時点で望まれる子どもの姿の記載による基準とし、改定したばかりの指針と要領を最大限いかすことがもとめられる。（基準枠組み設定の方法には、子どもの経験基準か達成基準か、年齢別基準か年齢自由基準かの軸が、OECD各国のあり方からは存在する。）

施設の運営事項記述：こども指針第2部を法的拘束性のある基準性をもつものとする。またこども指針では、指針単独ではなく、質評価と施設運営事項を関連づけることが重要であると判断されることから、施設運営は検討すべき重要事項であるが、カリキュラムであるこども指針とは分けて編成することが妥当である。

2) こども・子育てに関する理念に関して

文化的価値と哲学を示すミッションステートメントとしての第1部：児童憲章や児童の権利条約に記されているような、子どもの捉え方、最善の利益を保障する乳幼児期の保育に関する哲学・文化的価値と原理が明確に前文として出されることが必要である（北欧諸国をはじめ各国の改定カリキュラムでは目的が最初に明確に記された章構成となっている）。と同時に日本固有の価値としての「生活を生活で生活へ」とする倉橋以来の生活概念に基づく質保障を記述することが望まれる。

乳児期からの教育、良質経験の重要性の記載：脳科学等の発達から臨界期等が4歳頃までの早期にあることの指摘がなされていること、また早期投資効果が高いことの主張を鑑みると、中央教育審議会答申の幼児期における教育の重要性のみではなく、乳幼児期からの、養護と教育（いわゆる保育）におけるすべての子どもに対する質の高い経験の保障の重要性、乳児期からの一貫した家庭教育・保育・教育の連続性については言及されるべきであるだろう。

子どもの最善の利益と民主的市民としての子どもの理念：OECD参加各国カリキュラムに盛り込まれている共通の要素は以下の7つである（情緒の安定（well-being）、学習、全人格的な子どもの発達、アイデンティティ（所属観、自信、エンパワーメント）、コミュニケーション、創造性（自律性、探究、思考）、市民性（責任、連絡、平等）である。我が国においてもすでにその多くが指針と要領に含まれているが、人権尊重と民主的な市民としての子どもの理念の記載が一層求められるだろう。

家庭との連携・保護者の責務の記述：保護者、家庭の役割を前文あるいは本文内、あるいは独立して記載する国が増えており（ニュージーランド、ノルウェー、シンガポールなど）、日本でも第一部において子育てについての記述が導入されることが望ましい。

国ならびに地方公共団体の責任の記述：スタンダード実現に法的拘束力をもつ第2部において、国及び地方自治体の役目と責務が記述されることが、質保障の観点から必要である。

3) 第2部内容に関して：21世紀の社会的要請に応じる記述の吟味

・領域内容と独立に、あるいは領域内容内に21世紀にもとめられるキーコンピテンシー内容の記述を、改定カリキュラムに入れ込む国が増えてきている。具体的には、キーコンピテンシーとしてはOECD（自律的に行動すること、異質な人との交流・協働、相互作用的な道具の使用）、UNESCO（学び方を学ぶ、やり方を学ぶ、共に生きることを学ぶ、その人らしくあることを学ぶ）などの内容である。日本ではすでに含まれている面も多々あるが、改めてこれからの社会と乳幼児期の保育の在り方の観点から、1部2部の内容を検討することが必要であるだろう。

【1】保と幼一体化の方向づけは、中長期的に取り組むべき

“養護は保育所”、“教育は幼稚園”という根強い風評の影響があり、3歳以下を養護、3歳からは教育というようにタテに繋ぐ理解に陥りやすい。新システムの検討により、幼保一体化の取り組みが、子どもたちの生きる保育の現場を、「教育ぬきの福祉現場」と「福祉抜きの教育現場」に色分けさせてきた弊害を克服するだけの時間的余裕をもって、統合を目指すものとなるように願う。少なくとも向こう10年ぐらいの時間をかけて、保幼統合の道を探る協同体制構築を図るべきではないか。「こども指針(仮称)」は、そのための羅針盤となるように制定されるように、その構成と内容とを検討すべきである。

【2】「養護と教育の一体的取り組み」は、保育の担い手に委ねられること

子どもが、人への信頼感を育み、また自ら遊びの活動に主体的に取り組む、人と共に生きる生活文化を習得し、学びへの飽くことのない探求心の芽生えと、愛しみ豊かな人間性の芽生えとを、共に育むことのできるような実践の取り組みの担い手、それが保育者である。園生活の日々を共に生きて、常に共に在る過程のなかで互いに敬愛し合い、協働する自己の実現を目指すところに保育者という存在の重さがある。そのような保育の担い手の存在意義を希薄化させることのないように、こども指針の実質化は保育者の手に委ねられる重要性に留意し、保育の担い手がこの指針の中で十分に位置付けられる必要がある。

【3】「諸々の子育て支援」も規範性を有する取り組みであること

小規模保育、短時間利用者向け保育、早朝・夜間・休日保育、事業所内保育・広域保育、病児病後児保育、一時預かり等の担い手にとって、こども指針においてその実践・臨床の取り組みは、規範性を有することとすべきである。その場合、「こども園(仮称)」を対象とする指針の言及と関連性をもたせながらも別枠を設け、それによって、こども園同様に、保育の質、担い手への相当の処遇、保護者の適切な費用負担への配慮を明示すべきである。

【4】保育の質で「チルドレン・ファースト」の具現化が問われる

チルドレン・ファーストの施政方針に則って、子どもを原点にという保育の理念が尊重されるように、その実現に最善を尽くさねばならない。子ども主体の遊びと学びの生活を家庭や施設等で保証できるように新たなシステム構築をめざしていることを、「こども指針(仮称)」を制定する意図として明言すべきである。子ども主体の保育、環境による保育は、チルドレン・ファーストの実現のためのキーワードである。

乳幼児期の教育が「保育」という営みによって営々と築いてきた実践への認識が制度設計の議論の過程で希薄化させかねないことを、保育・幼児教育現場の保育者や保育学研究者、さらに保育者の養成課程を有する学校の教員は非常に危惧している。そのような懸念を払しょくし、教育と福祉の乖離する現状を改めて、子どもの乳幼児期の重要性を担保する「保育」を、こども指針の基本に据えるべきである。それが、文字通りの「チルドレン・ファースト」の具現化に他ならない。

こども指針（仮称）について

日本保育協会 島田 教明

＊保育とは環境を通して行う「教育」

「教育」が一律一斉的学習の意味で長年とらえられてきた。子どもが育つ時代背景、環境とうまく適応できなかったこともあり、学校教育においては、いじめ、不登校、学級崩壊などの諸問題がおきたのではないかな。結果的に「自立」をうながす教育スタイルを持てなかったのである。保育園、幼稚園、においても「こども指針」を考える上で、その現実には直視する必要があると考える。

「教育」その言葉の持つ意味を、「学校教育」の仕方、考え方を今、再確認する時ではないか。保幼小連携、接続を考える時に、絶対に必要なものとする。

かつて、保育指針に「環境」の大事さが取り入れられた時は、保育への夢、希望がひろがった感動を覚えている。その結果として、環境、設備（準備）を整え、生活、暮らしに準じていくことで、子どもたちの育ちは、変化してきた。また、子どもたちに保育の中で「選択」できる環境を用意していくと、「自己決定」、「自己責任」が芽生え、園生活の中で、自律から「自立」へうながす教育につながっていった。

そして「自立した個と個が影響」しあう世界で、遊びや学びを主体的に満喫する保育スタイルにつながった。環境を整え、一人一人を抱きあげられるような個を大事にする保育スタイルになることで、グループで学びあう姿、生活をしていく姿に保育園全体が生き生きと変容をみせていった。さらに、子どもたちの変化が、保育者、そして保護者にも影響し、育てることへの意識にも変化が見えてきた。

このような実際の保育現場で、学んだことの一つに「赤ちゃんは素晴らしい」という再確認であり、赤ちゃんの時から「生活の中にある学び」の環境を整えることでその発達に影響してくるのである。幼い時に「学ぶ」土壌を豊かにすることで、文字・数の理解力、深まり広がるのである。

＊赤ちゃんの時から「養護」と「教育」は渾然一体となっている。

この度の指針には、子どもたちも、保育者にも、夢、希望がさらにひろがることを望む。

年齢で保育、教育を分けることはないようにしていただきたい。

こども指針（仮称）についての要望書

- こども指針（仮称）の名称について、指針自体が法的規範性を有するものだとなれば、この名称では子ども自身の育ちに法的規範性がかかるようになるので、子どもの保育をする施設への指針であるならば、こども園において子どもを保育する者を対象にするべきであり、「こども園保育指針」とするのが適当と思われる。
- こども園保育指針の対象範囲はこども園に入園する0歳児から就学前の乳幼児を対象とすべきである。
- こども園においては「養護と教育」の両者を含む「保育」という用語に統一すべきである。
- 乳幼児の保健について、とりわけ配慮されることを望む。
 - ・ 昨年の新型インフルエンザ対応などは、保育園では限界を感じる。看護師が設置された条件での指針を検討する必要はないか？
- 障害児が保育園で共に生活することが一般的になりつつある。
 - むしろ障害児が共に生活できる世界から指針を検討することで、世界に誇るこども園保育指針（仮称）となるのではないか？
- 結果として保育所保育指針と幼稚園教育要領に加えて、こども園保育指針ができることが望ましい。

教育、保育の定義について

「教育」と「保育」の整理をする際に、今後、指定制が想定されるであろう多様なサービス（家庭的保育、事業所内保育所等）に対して指針の中ではどう扱われるのか、考えるべきではないか。（第2回意見より）

利用者（子どもと親）本位の視点で、言葉の定義において、混乱が無いように充分整理していただきたいと親は願っている。

関係機関への周知、今後起こりうる混乱への覚悟も必要であろう。

専門家や関係機関がお互い捉えている言葉のずれにより、地域の中でも理解し合えず、溝が深まっている現実もある。新システムにおいては、そのことを助長するものであってほしくない。

親の第一義的責任を果たすためには、固定的な家庭の理想像を押し付けるのではなく、親が子どもの発達や状況に応じて子どものいる暮らしを自ら組み立てることができるよう、サポートする必要がある。

「家庭に資する」部分にあたるかとも思うが、教育・保育の定義に、どう反映させるのか。

こども指針（仮称）の構成等について

「家庭や地域との連携・子育て支援等（告示）」をもちこむとあるが、これはこども園（仮）という施設に固有なものなのだろうか？

地域子育て支援拠点は、当事者に近い存在として、日常的に親同士の交流の場を提供し、初めての子育ての戸惑いや不安を軽減する場となっている。さらに、子ども同士の育ちをはぐくむことができる場所でもある。昨年度は、地域子育て支援拠点のガイドラインも作成された。

こども指針（仮）の全体構成においては、このような「地域子育て支援」が必要とされてきた経緯を示すとともに、様々な主体により、多様な形態（ひろば型、センター型、児童館型）で展開されている地域子育て支援拠点が共通に押さえておくべき点について、ガイドラインも参考にしていきたいながら、こども指針の中でも整合性をはかっていただきたい。

参考）

平成21年児童関連サービス研究等 地域子育て支援拠点事業における活動の指標（ガイドライン）

主任研究者 渡辺顕一郎（日本福祉大学教授）

尚、新システム施行後は、コーディネート機能が親子にとって身近な地域の中に必要であろう。

地域子育て支援拠点は、直接親子と関わり、情報を伝え、寄り添う立場にあるため、親子に一番近いところでコーディネート機能を担うことができる場であると考えられる。

地域子育て支援拠点は、すべての子育て家庭のニーズと社会資源をつなぐ地域のインフラ的な役割を果たしている。多様な当事者のニーズと支援メニューをつなぐ人材の育成は急務。切れ目のない支援のためには、各家庭の事情に応じたコーディネートができる専任の人材に安定的財源の確保を！

地域子育て支援拠点事業の4つの柱

子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
子育て等に関する相談・援助の実施
地域の子育て関連情報の提供
子育て及び子育て支援に関する講習等の実施

0歳～3歳未満児の約8割が保育施設以外で子育てをしているとともに、平成22年版子ども・子育て白書によると、**保育所待機児童数のうち低年齢児(0～2歳)が全体の約82%**を占めている。待機児童数の中には、一気に保育所入所という選択でなく、一時預かりや再就職支援、家庭的保育といった段階的なメニューによって緩やかに解決できるケースも含まれている。

産前・産後、保育所、幼稚園、放課後児童と**切れ目のないサービスの提供を目指すあたり**、0～3歳未満児の子育て家庭に身近にアクセスできる地域子育て支援拠点の果たす役割は大きい。

「**子育ての最初の一步**」を当事者ニーズに寄り添ってきめ細やかにコーディネートすることが、発達不安、虐待、待機児童問題といった**個々の喫緊の課題**に本当に必要なサービスを見極める機会にもなっている。

年齢区分別待機児童数

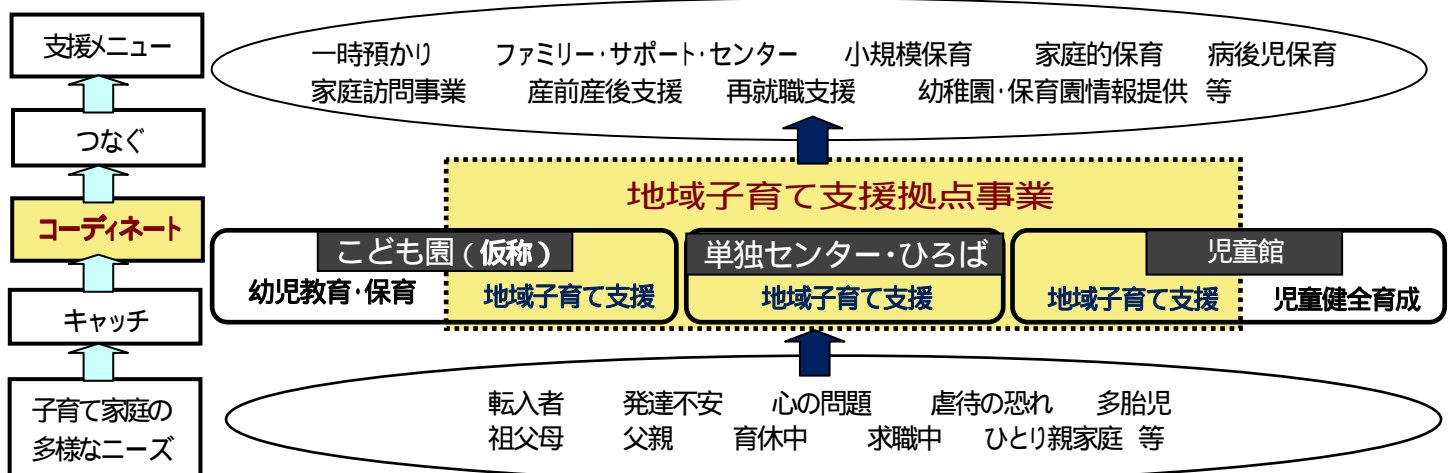
2009年4月1日現在

		利用児童数		待機児童数	
低年齢児(0～2歳)		709,399人	34.8%	20,796人	81.9%
	うち0歳児	92,606人	4.5%	3,304人	13.0%
	うち1・2歳児	616,793人	30.2%	17,492人	68.9%
3歳以上児		1,331,575人	65.2%	4,588人	18.1%
全年齢児計		2,040,974人	100.0%	25,384人	100.0%

(平成22年版 子ども・子育て白書より)

多様な子育て家庭が利用する地域子育て支援拠点は、地域の核となって**当事者のニーズをキャッチ**し、相談援助、情報提供、諸機関との連携など、適切な子育て支援事業や社会資源につなぐ**コーディネート機能**を持っている。また、NPOなどの市民が協働して担うことで、**行政だけでは担えない柔軟な対応**にも力を発揮することができる。

地域子育て支援拠点において、多様な**民間／公的な子育て支援メニュー**の中から、各子育て家庭がどのようなサービスをどう選択すれば良いのかをサポートするには、中学校区から小学校区に**専任の子育て支援コーディネーター**を設置し、安定的な財源で支える必要がある。



教育・養護に関する保育所の実践について

1. 保育の目標（保育所保育指針）

保育所は子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う。

（１）生命の保持及び情緒の安定を図る＝養護

（２）健康・人間関係・環境・言葉・表現＝教育

＊養護と教育の一体的な提供

2. 実践の一例「2歳児の上着の着脱について」

2歳児の上着の着脱では、養護的なかわりと同時に、子どもの感覚機能の分化や運動機能、他者とのコミュニケーションなど子どもの豊かな発達を支え促すための教育的意図をもったかわりをしている。

<着脱のポイント>

➤ 着脱に興味・関心を持ち『やってみたい』という気持ちが出てくるようにしていく。

① 着脱に関する題材の絵本や紙芝居を用意し、繰り返し読んで聞かせる

② 「ひとりですでたらいいね」と一人でできることへの期待と喜びを知らせていく



<着脱に取り組む環境の設定>

① 着脱しやすい服を着用してきてもらう。

② あわてずにじっくり取り組めるよう一日の流れを設定する。

③ 近くに子どもが全身を写して見ることのできる鏡を用意しておく。

<関わりと援助>

① 必要以上に手を貸したり、焦ることのないようにする。

② じっくりとやさしく見守り「もう少しだね」「できたね」など子どもが意欲的に取り組めるような言葉掛けをする

③ 「できない」と投げ出した時や、やる気のない時は、無理をさせずに気持ちを受けとめる。

④ できた時はたくさんほめて、一緒に喜び、自信をつけさせ、次のステップにつなげていく。

⑤ 子どもは自分でしたいという気持ちと、してほしいという甘えの気持ちがあり、その時の状況により対応する。

＜上着を着る＞

- ① 上着を着やすいように広げておいたり、ロッカーから取り出しやすいように置いておき、上着に興味を持てるようにする。
- ② 「着られるかな」等の声掛けで子どもが一人で着てみようと思欲が持てるようにする。

➤ 洋服のすそを持つ、かぶる、頭をだす。

- ① 「お洋服を持って、いないいないするよ！」と子どもにわかりやすく着方を知らせる。
- ② かぶれたら「いないいない」、頭がでたら「ばあー」といって着替えが楽しくなるような遊びを取り入れる。
- ③ 一人でできたら「わあーできたね。えらいね」とほめて、一緒に喜ぶ。
- ④ なかなか頭が出せない時は少し手を貸す。

➤ 袖を通す。もう片方も通す。

- ① 「お手てをグーにして」「〇〇ちゃんのお手て出てくるかな」と言葉を掛け見守る。
- ② 片方が出てきたら「わあー出てきたね」「もう一つのお手ても出してみようか」と誘う。
- ③ 両方できたら「できたー」といって、一緒に喜ぶ。



➤ 鏡を見て整える

- ① 「おなかをしまおう、上手にできたね。ハイポーズ」と一緒に鏡を見ながら喜んでほめる。
- ② 自信がついたら「またやってみようね」と次回の期待へとつなげていく。

＜配慮事項＞

- ① 個人差があるので個々の様子を十分に把握して、個々にあった関わり方をしていく。
- ② その日の体調や機嫌なども常に考慮する。
- ③ 家庭と細かく連絡を取り合い、共通理解の中で着脱の成長を見守る。